名古屋学院大学論集　言語・文化篇　第36巻　第2号　pp. 1–8

〔論文〕

日本の書道と中国の書法

――その源流と発展――

黄　　名　時・陳　　学　超

名古屋学院大学/陝西師範大学

要　　旨

書道は中国で生まれ日本に伝わり，それぞれの国で独自の発展を遂げてきた。中国の書道は技術的な面を重視し日本の書道は精神的な面を重視するという特徴があり，両者は異なる側面を持ちながらも深い繋がりを持っている。本論は，中国と日本の書道文化の違いを歴史的な背景も踏まえて考察した。

また，現代中国の書道界が抱える問題点を日本の書道との比較を通じて分析した。書道教育，書道文化の普及，書道団体の在り方，書道作品の評価基準，そして書道の商業化といった様々な側面から問題点を指摘し，より健全な書道文化を築くための提言を行った。

キーワード：書道，書法，中国書道界

Japanese and Chinese calligraphic traditions: Their origins and development

Koh Meiji, Chen Xuechao

Nagoya Gakuin University / Shaanxi Normal University

発行日　2025年3月31日

1. はじめに

本論では最初に中国の書道の起源と日本への伝播，そして両国の書道の発展過程の比較検討を行う。盛唐以降の中国では，書法が高度な技術体系となり，「書法」という言葉が定着した。一方，日本では「書道」という言葉が広く使われ続け，道教的な要素も強く残っている。中国書道は規則・基準を重視し，技術的な完成度を追求する傾向があるのに対し，日本書道はより自由な表現と精神性を重んずる傾向がある。このような日中における書道の思想的な側面にも焦点を当てて論ずる。

後半では，中国の書道界が抱える問題点を検討する。書道教育の不足，書道文化の衰退，書道団体の官僚化，書道作品の評価基準の曖昧さ，そして書道の商業化など多岐にわたる問題点を検証する。最後に日中両者の比較対照を行うなかで，日本の書道教育や書道文化には見習うべき点が多くあることを提言していく。

2. 日本の書道と中国の書法

現代において，漢字の書写芸術を力強く提唱している国は中国と日本の二つの国である。中国では「书法（書法）」と呼び，日本では「書道」と呼ばれる。

一般に，中国書法は「法」を重視する。「法」とは規則，すなわち一種の技芸的な基準を意味する。中国書法は伝統的な真書，草書，隷書，篆書の書法を範とし，歴代の書家の書跡を模範とし，碑林の遺物を経典としてその書写の基本技術を第一義に置いている。「不工」から「工」へ，すなわち「粗」から「精」へと習得した文字を美しく整然と，そして意味を明確に表現することを目指し，さらには鑑賞に堪えるものにすることを目指す。芸術，鑑賞，装飾としての書法はこの基礎の上にさらに個性と創造性を求め，美的価値を追求する。

一方，日本の書道は「道」を重視する。この「道」とは精神や芸術的な悟りを意味する。日本の書道は漢字の書写を基礎としつつも伝統に縛られることなく，芸術的な構想を重視する。いかに個性や想像力を駆使して新しい意匠を創出し独自の境地やスタイルを作るかに重きを置いている。文字を当初の「工」から「不工」へ即ち「精」から「粗」へと，さらには漢字の書写を宗教的な信仰の高みに昇華させ，一種の頗る神聖な「道」とするのである。その中で，学問僧は書道においても重要な役割を果たしている。現代の日本の書道家は，必ずしも楷書を修得したり伝統的な漢字の書写芸術の規範を守るわけではなく，漢字の実用性を部分的に剥ぎ取って仮名の書道を増やす傾向にある。書写の技術的な完成度よりも，むしろ文字を通して表現される境地，情操，そして芸術的な美しさを追求することに重きを置くこと，これこそが日本民族文化特有の「書道」となっている。

実のところ，中国書法と日本の書道は名称こそ異なるが，「法」と「道」は表裏一体であり対立するものではない。いずれも筆法や構成を追求するとともに，芸術を通して自己を磨き，書道によって道に通じ自然の法則に帰依することを目指す。ただし両国は漢字書写芸術の歴史的な発

展においては「同源異流」，すなわち共通の起源をもちながらも異なる美的観によってそれぞれ独自の道を歩んできたため，全く同一というものではない。

3. 書道の起源と日中の比較

書道の源流は中国にある。書道という用語は中国で生まれ，日本に伝わり発展してきた。

3.1 中国における書道の起源

漢字の書写芸術に関する「書法」という言葉は，盛唐以前の中国には存在しなかった。「書」という言葉は，周代の教育体系における「六藝」（礼，楽，射，御，書，数）の一つである「書」に由来し，後には書芸とも呼ばれた。魏晋南北朝時代になると書芸は繁栄し，書学研究の成果が積み重なり，さらには老荘思想や玄学の風潮が盛行して書学にも道教的な色彩が加わったことから「書道」という言葉が生まれた。書道は単なる文字を書く行為ではなく，修身修練や悟道に通じるものとされた。「書道を知り，これを学び体得すれば，必ずや陰陽の奥義に通達できる」，「書道を得れば，心に従って妙逸を表現できる」（『李少白論書道』）という記述がある。晋代の王羲之の洒脱且つ多様な行草や，盛唐の張旭，懐素の悲喜交々の感情溢れる狂草など，これらの書聖が中国古代の書道精神を体現していると言えるであろう。

3.2 日本への書道の伝来と発展

3世紀には漢人が日本へ渡来して漢字が日本に伝わる。そして7世紀には儒学や仏教とともに漢字による書道も日本で流行し始める。奈良時代には貴族の間で中国の書法が学ばれた。平安時代には中国の書法を吸収しながら独自のスタイルを徐々に形成し，日本の書道が独自の様式を確立する。『蘭亭序』は日本でも高く評価され，書家のお手本として模写の対象となった。筆法や構成においてその影響を受けている。754年，鑑真の東渡によって王羲之や王献之の書が日本に伝わり，熱狂的に日本人に迎えられた。多くの書家が，王羲之の書法の風格を表現できる作品を書くことを名誉とした。その後，空海が遣唐使として長安に留学し，日本の書道の基礎を築いている。

盛唐以降，日本は中国文化を積極的に吸収し，書法が日本に流入した。王羲之の書法は日本において「手師」（書道大師）として崇められ，千年もの間その地位を保っている。空海をはじめとする「三筆」（空海，嵯峨天皇，橘逸勢）は「羲之再世」，すなわち王羲之の再来と称えられた。その後，日本の書家小野道夫らが王羲之の漢文草書を基に，草書の形と構造を借用しながら日本語の仮名を書き表し日本の「和様」の書体を創出した。このようにして日本の書道が中国の書法から独立した体系を築いたのである。小野の功績は「三筆」に続く日本の書道のもう一つの一里塚であり，「三跡」の一人と称されている（小野道夫，藤原佐理，藤原行成）。これは日本の書道が独自の道を歩み始めたことを示す重要な出来事であった。その後，中国の書法界の顔真卿や趙孟頫の楷書が，その雄渾壮美かつ気勢気迫の風格でもって日本の書道にも影響を与え，日本の書

道の技法と審美眼のさらなる発展を促した。

8世紀以降，中国の盛唐時代には書道は詩歌と同様に成熟し，石碑の楷書が一時隆盛を極めた。「永字八法」の筆法や九宮格の規範など漢字の筆法の形式や構成法がますます豊か且つ複雑になり，そこで基準が重要視されるようになる。こうして「書法」という言葉が使われ，定着していく。記録によると，唐の太宗の貞観元年，長安の文武五品以上の官僚で，書法を好み才能のある者は弘文館で「書法」の講義を聴くことができたとされる。宋代には理学が盛行し，書道は「雕虫小技」，すなわち取るに足りないものとされ「書道」という言葉は廃れた。今日に至るまで，中国では「書法」という言葉が使われ書芸や書道の要素も当然含まれている。「書道」という言葉は，かえって日本がこれを受け継ぎ発展させてきた。

また特筆すべきは，清末の中国の書家楊守敬が外交官として日本を訪れ，漢魏六朝の石碑拓本や隋唐書法などに関する貴重な資料，そして彼自身の古風な力強い書の作品を大量に持ち込んだことである。それは当時，日本の書道界に強い衝撃を与えた。日本滞在中，楊守敬は日本の書家との交流および書道講義や展覧会の開催などを通じて中国書法の魅力を伝え，日本の書家たちの中国書法への関心と熱意を高め日本の書道芸術の発展を促した。楊守敬は日本の漢字書道の父とも呼ばれている。

4. 日本の書道との比較から見た現代中国書道界の課題

現在の中国の書道界では論争が激しく，問題が多い。その要点を抽出し，日本の書道の理念と実践および発展と比較して以下に論証を行い，様々な問題点を考える。

その一，日本の今日の書道教育は学ぶに値するものがある。日本の大学の書道教育分野は一般に3つに分かれており，それぞれの分野で専門的な人材を育成している。

書道教育：学生の優れた書写能力を育成し，将来，書写教育に携わる小中高校の教師を養成する。

書道芸術創作教育：学生の優れた芸術創作能力と審美眼を育成し，それによって専門の書道家になる道を開く。

書道理論研究教育：書道理論家の育成を使命としており，一般に中国文化研究専攻の中に設置されている。（例えば，日本の筑波大学の書道教育専攻は松村茂樹など多くの書道理論家を輩出し，中国書画研究にたいへん功績がある。）

これに対して中国では近年，約100以上の大学が書道専門課程を設置しているが一般的に書写練習にとどまっている場合が多く，書道芸術や書道理論に関する教育が不足している。中国の書道理論の評論と鑑定も，ほとんどが書道の作者が担当している。古代の「書論」と現代の書道理論の研究はいまだに軽視されている。このことが中国書道界における理論的な根底の薄さや，様々な意見が飛び交う状況を生み出している原因になっている。

その二，書道は日本人の生活に深く根付いており，多くの国民が書道を楽しんでいる。それは，

例えば日本の筆書きなど，書が人々の生活の中に溶け込んでいることである。日本の小中学校の教科には，毛筆による書道の習字授業がある。「漢字能力検定」(略称「漢検」)や書道の資格試験は，日本人の教養を表す重要な指標であり，大学入学や就職の際の評価の参考になっており，国民の文化レベル向上に大きく貢献していると言える。また，「漢検」は年度ごとに「今年の漢字」を募集し漢字文化の普及に大きな役割を果たしていることでも知られる。日本では書道は茶道や華道とともに日本の女性が特に好む風流なたしなみである。年賀状は筆で書きたい人もおり，贈答品や嫁入り道具には書道の作品もある。日本の書道愛好家は2000万人といわれており，日本人の5，6人に1人は筆で書く練習をしていることになる。書家といって書展を開いたり作品集を出したりできる人は100万人ほどいる。このような光景は中国を大きく上回っており，中国の伝統文化を受け継ぐ人々が深く考えるに値することである。

その三，日本の書道協会組織の民間化，コミュニティー化の経験は参考に値する。日本の書道団体は民間主導で運営されており，地域に根差した活動を行っている。書道関連イベントや書道展もほとんど地域住民が主体となって開催されることが多く，全国的な大規模なコンクールは極めて少ない。書道展覧会は通常民間の「後援会」が主催し，全国的な賞はほとんどなく書道の主催者も著名人とは限らず，主として一種の文化娯楽といえる。文房四宝を扱う東京銀座「鳩居堂」の3，4階の画廊では書道の個展が年中開かれている。年ごとの漢字の大書まで，京都の清水寺のお坊さんが筆を取っている。

これに対して中国の書道団体である中国書道協会は政府の国家文化部「全国文連」の下部組織になっており，主席，副主席などの地位はその人の書道方面の価値や社会的地位に結びついている。毎回の全国展覧会も全国書道大評論賞の授与など，いかめしく神秘的で，官僚化行政化の雰囲気が増したため民衆から遊離し問題が多く不満の声が後を絶たない。中国では書道が日常生活から遠ざかりつつあり，書道人口も減少しており論争の種となっている。書道団体が政府主導のもとで運営され権威主義的な側面が見られ，国民との間に距離があるといえよう。書道団体の民主化が必要である。

その四，日本書道の明晰な審美眼を見ると，中国の書道界で明確な書道評価基準を設ける必要があることを考えさせられる。日本の書道界では書道作品を評価する明確な基準が確立されており，書道家と書道教育家，理論評論家などがそれぞれの役割を果たしている。書道ではまず毛筆で書くための基本的な道具をもつこと，一定の行書草書の基礎的技能があること(伝統的な楷書を学ぶとは限らない)，次に書画一体を強調し，深い内包と境地を持ち想像力と個人の豊かな風格および現代的な再創造の品格を持っていることの三つが要求される。すなわち日本の書道では書道の基本技術を習得した上で，独自の表現や深い意味をもつ作品が評価される。また，書道と絵画の融合も積極的に行われている。

一方，現在の中国書道界の紛糾を考えると，およそ2つの相容れない極端な対立のケースがあるのが分かる。一つは，伝統的な書法に固執したりあるいは「文字匠」を推賞したり，あるいは

多くの古典的名家の作品の要素を書道の中に見出して初めて書道芸術と認め一部の画家の個性的でロマンチックな書を認めない人々がいることである。もう一つは，近年，一部の中国の「書道家」の間で漢字表記の規範を学ばず現代的な表現の「乱筆」を重視する「江湖書道」の人たちが現れたことである。「乱筆」のような「書道」は日本では「墨芸」と呼ばれ，日本のいくつかの現代派画家によって創始されたものであり，近年中国の書道界にも影響を与えているが戒めるに値しない。現在，中国では様々な意見が存在し，評価基準が統一されていない。明確な評価基準の確立が求められる。

上述のこの2種類の極端な書写法はそれぞれが異なる名士に支持され，あるものは書展にも出品されている。これゆえ，社会では書道に対して何の考えも出せずに論争だけが相次ぎ，書道芸術の尊厳と信用が相当損なわれている。中国の書道芸術の理論評価システムを構築することが，目下の課題である。

その五，日本では書道作品が過度に商業化されることはなく，むしろ芸術性を重視する傾向があるところは中国書道界の見習うべき点である。日本の書道作品と書道活動は，主に自分で楽しみ交流と芸術鑑賞を学ぶことを目的としており，高値を付けた作品は少ない。市場のギャラリーと書画芸術品の取引価格は一般の人々も気軽に購入のできる値段である。有名な書道家の作品であっても特に高く売られてはいない。一般の愛好家が書道家に一幅の書を求める際も，敬意を表すため象徴的にわずかなお金を支払うだけで，書道家のほうも作品を売ることを第一の目的としておらず，書道そのものを楽しむことに重きを置いている。

一方，現在，中国書道界では人々の心は浮き足立っており，一部の書道家やコレクター，オークション業者は名利に流され，相場をつり上げて書道を大々的な金儲けの道具としている。書道作品が高額で取引されることが多く，商業化が進んでいる。日本の書道が上品で清らかであることと比較すると，深く考えさせられる。

5. 結語

中国書道教育に従事し，また日中の書道展覧活動に参加する中で体得した筆者の経験を踏まえ，本論を以下のように纏めておきたい。

書道は中国で生まれ日本に伝わり，それぞれの国で独自の展開を遂げてきた。中国書道は「法」を重視し規範に則った書写を追求する傾向があるのに対し，日本書道は「道」を重視し，より自由な表現を重んずる傾向があることが特徴となっている。

日本書道との比較から見た中国書道の課題を考えると，現代の中国書道界は様々な問題を抱えていることが分かる。日本との比較から問題点を考察した結果は以下の如くである。

・日本の書道教育の重要性

日本の学校では書道教育が「書写教育」，「書道芸術創作教育」，「書道理論研究」の3つの分野

に分かれており，それぞれの分野で専門的な人材を育成している。これに対して中国の大学における書道教育は書写練習にとどまっている場合が多く，書道芸術や書道理論に関する教育が不足している。このことが中国書道界における理論的な根底の薄さや様々な意見が飛び交う状況を生み出している。

・書道が日常生活に根付いている日本

日本では小中学校で書道が必修科目となっており，「漢字能力検定」など書道に関する資格試験も普及している。また，書道は茶道や華道とともに日本人の生活に深く根付いており，多くの国民が書道を楽しんでいる。これに対して中国では書道が日常生活から遠ざかりつつあり，書道人口も減少している。

・日本の書道団体のあり方

日本の書道団体は民間主導で運営されており，地域に根ざした活動を行っている。書道展も地域住民が主体となって開催されることが多く，官僚的な色彩は薄い。これに対して中国の書道団体は政府の指導のもとで運営されており，官僚的な色彩が強く国民との間に距離がある。

・書道作品の評価基準

日本の書道界では書道作品を評価する明確な基準が確立されており，書道家，教育家，理論家などがそれぞれの役割を果たしている。これに対して中国の書道界では伝統的な書法に固執する人や現代的な表現を重視する人など，様々な意見が存在し評価基準が統一されていない。

・書道の商業化

日本の書道界では書道作品が過度に商業化されることもなく，芸術性を重視する傾向がある。これに対して中国の書道界では高額な書道作品が取引されるなど商業化が進んでいる。

これらの日中比較から，中国の書道界が抱える問題点は書道教育の不足，書道文化の衰退，書道団体の官僚化，書道作品の評価基準の曖昧さ，そして書道の商業化など多岐にわたることがわかる。日本の書道が持つ地域に根ざした活動や多様な表現を尊重する姿勢は，中国の書道界にとって学ぶべき点が多いと言えよう。

小論の叙述の中で不備な点があると思われる。大方のご教示とご斧正を乞う次第である。

最後に筆者（黄）の七絶一首を付して筆を擱く。

名學日月如梭
執鞭轉眼卅余年，瀬戸校園遷熱田，走馬燈般離職日，今春耕讀啟新篇。
（乙巳元旦）

参考文献

《日本书道史》韩天雍，人民美術出版社，2021年

《中日禅宗墨迹研究》韩天雍，栄宝斎出版社，2020年
《从兰亭到钟鼎》莫家良
《中国书法史增订本》沃兴华
『日本の書道』毎日新聞社，1972年
『書の美』講談社，1982年
『書の表現』岩波書店，1985年
『中国書道史』東京大学出版会，1987年
『書道の技法』日本放送出版協会，1989年
『日本書道史年表』東京堂出版，1989年
『書の古典』小学館，1990年
『中国書法辞典』二玄社，1991年
『日本書道辞典』二玄社，1993年
『中国書道史年表』玉村霽山，二玄社，1998年
『中国書法を基盤とする日本書道史研究』古谷稔，竹林舎，2008年